

# ヨーロッパ東西のはざまを見て

秦 滋 康

## 1. はじめに

この印象記は、ヨーロッパで、ベルリンの壁崩壊にはじまり、ソ連邦消滅、独立国家共同体誕生と、ヨーロッパ大陸をゆるがした大事件がたて続けたのが平成3年(1991年)。その翌年に、高速道路調査会の第26回海外道路調査団に参加した時のものである。

## 2. 調査内容

調査団は、フィンランド、ドイツ、オーストリア、スイス、フランスを回り、各国の高速道路の現状と将来計画、大規模改良計画、維持管理などについて幅広い分野での調査をすべく、公式訪問と現場見学を行った。

旅行では、モーツァルト没後200年の節目に当たり、ヨーロッパの古い歴史と、かおり高い文化の一端にも触れる経験ができた。

ドイツをのぞいて、各国とも、高速道路は完成されていました。高速道路の乗り心地は快適そのものでした。統一後間もないドイツの首都になる予定のベルリン市は、東西問題の象徴ともいべき「ベルリンの壁」の撤去工事が街の至る所で行われ、路上に放置されたトラバントの廃車には驚きました。

しかし、再建は、急ピッチで進んでいる状況であった。昨年のベルリンマラソンを見る限り、パーフェクトでしょう。また、特筆すべきことは、日本の高速道路の規範となったアウトバーンを、ベルリンからミュンヘンまでの640Km、ミュンヘンからウィーンまでの450Kmをバスで走破したことである。特に、旧東ドイツのアウトバーンの走行は、貴重な体験であった。西側のアウトバーンに比べて、東側のそれは、建設後50年間放置状態のため、路面がガタガタに傷んでいた。公共施設の健全な維持管理が、どんなにか大切であり、いかに努力をする

必要があるか教えてくれた良い見本である。

日本の高速道路網も、計画路線だけは、完成することに努力する必要があると、考えさせられました。いまでも完成を期待しています。

もう18年前にもなる海外道路調査のことですが、この素晴らしい21日間の体験は、これからの残り少ない人生にとっても、必ず役立つものと確信しています。また、もう一度、いきたいと考えています。

最後に、私にあたえられた命題は、「日本をはなれて日本を考える」ということでした。難問でした。今でも未解決ですと、答えるしかありません。この旅行での印象…強く感じて忘れられないこと…をそれぞれの国から発信してみようと思います。

## 3. それぞれの国から

### [フィンランド(ヘルシンキ)発]

北欧の日本を目指しているフィンランド、2度目のヘルシンキは冬の重々しい時とは違い、いかにも静かなたたずまいを見せてくれました。フィンランドに行ったらFINRADIAを飲む、大好きなサウナに入る、と決めていましたので、まずは2つを成し遂げて順調な滑り出しです。



今も残る石畳と街路樹(フィンランド)

**【ドイツ(ベルリン)発]**

統合になったばかりのドイツ、同じ第二次世界大戦の敗戦国でありながら分割されたドイツ、何か日本を超える強さをもつ、きっと強いドイツが世界の舞台に登場してくるような気がします。

**【オーストリア(ウィーン)発]**

音楽の都、バロックの都、文化の都、建築の都、森の都、ウィーンを形容する言葉はたくさんありませんが、不思議な町です。帰国して普段の生活の中で“突然に”“ふっと”“むしように”“なにげなく”この町のすべてが思い出されます。特に森を守るためにヨーロッパで一番厳しい「森の法律」を定め、たとえば500ha以上の山林の持ち主はウィーン大学で学ぶことを義務づけ、良い環境、すばらしい自然を守るために必死の努力をしていることを聞きました。そして、ウィーンの水のおいしさ、もう一度来るなら絶対にウィーンです。

**【スイス(ジュネーブ)発]**

私の選んだ1枚の写真はシオン高架橋です。この橋の架設中のスライドが会社であって、講習のときなどに「シオン高架橋です」と説明していた橋に出会えたことです。私のメモには「レマン湖の反対側、崖の中腹に走る高速道路のスレンダーなFCCの連続橋梁群に見いる」とあります。



レマン湖のほとりとリオン城から望むシオン高架橋(スイス)

**【フランス(パリ)発]**

パリ・ヌーヴォー 新しいパリのこと、1つはガラスのピラミッドは「ルーブルの生きている心臓」、

とにかくルーブル美術館で本物の「モナリザ」を見ることができればもう言うことはないのです。鑑賞に更けることしきり、絵の中に道が見えていましたがこの道は何の道なのかを考えていました。2つめはデファンス地区にある巨大なキューブのごときモニュメント、グランドアルシェです。ルーブル宮からシャンゼリゼ通りを経てエトワール広場の凱旋門に至る延長線上に建つ20世紀の凱旋門、そして周辺のモダンなビルと広場、大統領令で行われているこのプロジェクト、100年後に見てくれと呼び掛けているフランスのストックの深さとパワーをしみじみと感じました。

**【日本(札幌)発]**

札幌市はドイツのミュンヘンと姉妹都市であり、記念して「ミュンヘン大橋」という橋が架けられており、私の会社も施工しましたことから、帰国後その渡橋式に出席しました。バルコニーには6枚のパネルがあり、ミュンヘンの絵が書かれています。すぐにミュンヘンの街と1リットルビールを思い出しました。

**【札幌(平岸)発]**

帰国当日、息子から言われたことがある意味では印象に残ることになりました。

1つは国際電話での声のはつらつとしていたのか、日本に帰りたくないと言うのではと思われ、顔を見るまで心配していたこと、もう1つは毎日の酒のおいしかった話に出社拒否症だけにはなるなよ、と…。ともかく、「日本をはなれて日本を考える」という命題には結論もなく、いい仕事をしたい気持ちが頭の中を駆けめぐっています。

**秦 滋 康** (はた しげやす)

技術士(建設部門)

(株)イーエス総合研究所 統括技術部長

